

学長式辞

—2011（平成23）年度入学式—

平成23年4月4日

本日晴れて、平成23年度相愛大学入学式に出席された音楽学部、人文学部、人間発達学部および音楽専攻科の新入生384名の皆さん、ご入学おめでとうございます。新入生のなかには、はるばる中国からの留学生77名も含まれています。また、この日を心待ちにしてこられたご家族の皆さまにも心よりお祝い申し上げます。相愛学園長大谷紀美子様ならびに浄土真宗本願寺派総長をはじめ関係各位のご臨席を賜り、平成23年度の入学式を挙げることは、本学にとりまして誇らしく、大きな喜びであり、教職員ならびに在學生とともに、皆さんが本学の構成員となられたことを心より歓迎いたします。皆さんには最初にお祝いの言葉を贈らねばならないところですが、冒頭に黙念し哀悼の意を表しましたように、このたびの東日本大震災のことに触れないではられません。

未曾有の大災害でした。今日入学式を迎えられた皆さんのなかには、津波で流され、いのちを落とし、町や家を失い、肉親を失い、不安と虚脱感のなかで日々を送られている親族や知人がおられるかもしれません。被災地の人たちと災害に遭わなかった私たちとの間には、越えがたい深い溝があり、そこに懸ける言葉を見いだすことができません。昨日の天声人語に、アウシュビッツを訪ねた開高健の「すべての言葉は枯れ葉一枚の意味も持たないかのようであった」とい

う呻吟が紹介されていました。私にはただ憶念してお念仏申すことしかできません。報道によりますと、新年度の入学式を中止または延期する大学が、東北・関東地方の国公立446校（短大を含む）のうち、少なくとも130校に上るとのことです。被災者の方々の胸中を察すると、いま私たちがこうして入学式を挙げてお祝いすることが、後ろめたく気がとがめ、申し訳なく思えてきます。そうしたなかで私たち誰もができることは、義援金や物資を送ったり、水や食料の買いだめをしないことであつたり、節電や節水を心がけることなどでありましょう。

相愛大学には、皆さんも入会することになる学生会という組織があります。学生同士の交流や教職員と学生との交流を支援したり、いろんなクラブや学生による委員会を統括する団体ですが、この学生会が中心となって、災害が起こってからすぐに駅の周辺で義援金の募金活動を行い、数日の間に約60万円の浄財を集めてくれました。今後もこの募金活動が継続され、被災地の人たちへの支援と被災地の復興に貢献することを願っています。また、相愛大学としても今月、本学の音楽学部教員によるチャリティ・コンサートの開催を企画しているところであります。いずれHPでもお知らせしますので、どうかご家族の皆さんにもご参加くださいますようお願いいたします。

さて、まず最初に相愛大学の使命についてお話したいと思います。大学一般の目的については、学校教育法の第八十三条に、「大学は、

学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とあります。相愛大学の学則に明記している目的も例外ではありません。しかし、この学校教育法に定める目的の上に、「本学は大乗仏教特に浄土真宗の精神に基づき、宗教的情操を涵養し広く知識を授ける」という目的があります。なぜなら、本学には独特の歴史と誇りがあり、それが建学の精神となっているからであります。

皆さんが今日から入学される相愛大学は、今年、創立 123 周年を迎える長い歴史と伝統を持つ大学です。相愛大学の設置者である学校法人相愛学園は、1888 年（明治 21 年）に浄土真宗本願寺派 21 代門主の明如上人が、鎌倉時代の日本仏教を代表する宗教者であった親鸞聖人のみ教えに基づいて、大阪本町の本願寺津村別院（北御堂）内に設置された相愛女学校を起源とし、女子に対する学芸の教授と宗教的情操の涵養を目的といたしました。

本学の校名「相愛」は建学の精神を表すものであり、その由来は大乗仏教の代表的な経典であります『仏説無量寿経』にある「當相敬愛（まさに、あい敬愛すべし）」という言葉にあります。この當相敬愛という言葉は、「世間の人民にして、父子・兄弟・夫婦・家室・中外の親属、まさにあひ敬愛してあひ憎嫉することなかるべし。有無あひ通じて、貪惜を得ることなく、言色つねに和してあひ違戻することなかれ。」（『浄土真宗聖典』、55 頁）の段落にあります。私たちが社会生活を営む上でのあるべき道徳観を釈尊が示されたものです。

お互いに敬愛の念をもち、憎んだりねたんだりして怒りの心をもってはならない（心の徳）、互いに必要とするものを惜しみなく融通しあい（行いの徳）、言葉と顔色を和らげ（言葉と表情の徳）、反発しあってはならない、と説かれています。當相敬愛とは、端的に言う「自らを愛するように他者をも相敬える」という意味であります。

1906年（明治39年）には、相愛女学校を相愛高等女学校に改めるとともに、相愛女子音楽学校が増設されました。現在の音楽学部の淵源であり、私立の音楽学校としてはきわめて早い時期の開設でありました。以後、幾多の変遷を経た後、1958年（昭和33年）には相愛女子大学音楽学部が設置され、初代音楽学部長には、わが国において西洋音楽の普及に努め、童謡「赤とんぼ」などで有名な山田耕筰が就任しました。

1982年（昭和57年）には校名を相愛大学と改め、男女共学の音楽学部を設置しました。その後本町学舎からこの南港キャンパスに移転し、1984年（昭和59年）には人文学部、そして2006年（平成18年）には人間発達学部を設置し、現在の3学部体制となっています。2008年（平成20年）には相愛学園は創立120周年を迎え、この120周年を「新たなる始まり」として、相愛をさらに光り輝く未来へ導くための諸事業を進めるために、昨年度、「相愛大学将来構想」を策定したところであります。

「當相敬愛」という建学の精神は、ますます輝きをもって本学の理

念として継承され、教育・研究・社会貢献のあり方を方向づけております。本学に今も脈々と流れる自由で思い遣りに満ちた気風は、本学の生い立ちと無関係ではありません。親鸞聖人のみ教えを中心とした宗教的情操教育を教育の中心にすえている本学は、国公立大学のなかにおいてユニークな学園であり尊いことでもあります。いわば教育に筋が一本通っているといえましょう。私たちの兄弟学園は京都の龍谷大学、京都女子大学をはじめ全国に27校あります。

以上、本学の歴史と設立の経緯を少し詳しくお話しましたが、歴史というものは実に重みのあるもので、それを学ぶことはきわめて大切なことです。歴史は、単に過去の歩みを知ることだけではなく、現在を考え、そして未来の方向を見定めるのに有益だからであります。イギリスの歴史学者であり政治学者でもあったE. H. カーという方に、「歴史とは過去と現在との対話である」という有名な言葉がありますが、この対話こそが人間が自身のことを内省し、人間の叡智を生み出す源となるのです。本学の歴史を顧みるとき、先人たちの先覚性に驚嘆すると同時に、理想の実現に向かう、その行動力に感動せずにはおられません。その感動は、ともすれば現状に安んじて惰性に流れがちな心に新たな活力を与えてくれます。皆さんには相愛大学のユニークな歴史と建学の精神を誇りに思っていたきたい。これが申し上げたい第一の点であります。

今日の入学式は、本学においてそれぞれの高い志を果たすべく意欲を燃やしている皆さんが一堂に会し、これからの相愛大学での勉学

と生活について期するところを再確認する場でもあります。大学生生活は人生の中でもっとも自由な生活を享受できる稀有な時期であり、これまでの受験勉強から解放され、自らの可能性を探ることのできる非常に恵まれた期間です。それだけに、これからの在学期間をどのように過ごすかが、皆さんの今後の人生を左右するといっても過言ではありません。そのために最低限、心していただきたい事柄がいくつかありますが、今日はそのうちの二つについてお話いたします。

まず一つ目は、先ほど申しました「自由」ということについてであります。皆さんは、これまでのどちらかといえば他律的な自己を捨てて、自律的な自己（自分で自分を律することのできる自己）をこれからの大学生活において確立する努力をしてください。これまでの中学・高校生活と違い、大学生活においては自由を謳歌することができますが、ところで、自由とはいったい何でしょうか。自由とは「自らに由（よ）る」と書きます。抛るべき自分がたよりない自分であれば、他人や権威に追従する自分でしかありません。また、エゴイズムに満ちた自分であるならば、その自分の自由は他人の自由とぶつかり、お互いに不自由になります。

孔子や釈尊やイエス・キリストなど、今から2000年以上前に生きた人たちが私たちの人生に今なお意味と方向を与えてくれるのは、その教えに真理の言葉があるからです。釈尊が入滅されようとするとき、弟子たちは釈尊が亡くなられたあと、誰をたよりにしたらよ

いだろうかと心配しました。そのことに気づかれて釈尊は、「自らを灯明とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、真理（法）を灯明とし、真理をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」と語られたといえます。釈尊の遺言として伝えられる、「自灯明、法灯明」の教えとして有名な言葉です。

私たちはややもすれば他人の言ったことに左右されがちです。とくに権威に追随して、自分で考え、自分で何が正しいかを見定めようとしなない傾向があります。他人の言葉を鵜呑みにしてたよるのではなく、何が正しいかを判断できる自分を確立してゆくことが大切であることを「自らを灯明（ともしび）とせよ」と教えられたのです。それでは何を根拠として正しい判断をすればいいかというところ、釈尊は「法を灯明（ともしび）とせよ」教えられました。法とは真理、物事の本当のあり方のことです。最初に私たちは正面の、車輪のような、あるいは船を操縦する操舵輪のようなものに向かって礼拝いたしました。実はこれは「法輪」といって、仏の真理・教え、法のシンボルを表したものです。自由、即ち自らをたよりとすることと法とは不可分の関係にありますから、私たちはこの法輪を尊び礼拝するのです。

次に二つ目ですが、皆さんは何のために大学に進学したかを今一度考え、これからの大学生活の目標を立ててください。それが皆さんの今後の良き選択と決定のための出発点となるのです。自由と解放感だけに浸ることなく、それに伴う責任を厳しく自己に問える人間

になってください。そこで、目標の設定ということについてお話してみたいと思います。遠い将来のことまで考えることのできる人は、人生に希望と目的をもち、困難な事態に遭遇してもそれに負けずに努力することができるでしょう。ですから、将来を展望するということはとても大切なことだと言えます。最近の心理学の研究によっても、遠くを考えることのできる人は、今がつらくてもそこから逃げ出したり、一時の誘惑に惑わされたりすることなく、大きな目標を達成できることが明らかにされています。将来への展望があるからこそ、今を大切に生きるという態度が生まれ、それがその人の行動を規制するからです。

ところで、遠い将来のことを考えることが大事だといいましたが、将来展望は長ければ長いほどいいというものではありません。ある研究によると、大学生に目標をあげてもらい、その達成時期を予想してもらったところ、平均値は 2.3 年後だそうです。そして、自律した自己（アイデンティティ）が確立しているかどうかと達成時期との関係を調べてみると、5 年以上もの長期の目標を設定した人は、概して自律性の獲得がなされていないことが明らかにされています。

このことは何を意味しているかというと、遠すぎる目標は、その人の現在の行動を動機づけたり、現在の行動に没頭することを妨げ、将来が単なる夢や空想であつたりする、ということです。ですから、中ぐらいの時間的距離の目標を持つことが必要で、皆さんにとっては 4 年後の卒業時を展望して、人によってはそれを 2 つくらいに分

割して、現実味のある目標を設定してください。イギリスの歴史家トマス・カーライルに、「大切なことは、遠くにぼんやりと存在するものに目をやることではなく、手近にはっきりと存在することを実行することだ」という名言があります。いたずらに過去や未来に逃避することなく、一日一日を大切に過ごしてください。そのことによって、困難に直面しても希望を失わずに、常に新鮮な感動をもち、生き生きとした大学生活を送ることができるはずです。

常に初心に帰り、いまの緊張と意気込みと謙虚さを忘れないようにして、悔いのない学生生活を送っていただくことを念願して、私の式辞といたします。

本日はおめでとうございます。

以上